

顯基説話考

——『撰集抄』の西行仮托性に鑑みて——

杉 浦 広 美

目 次

- はじめに
- 一 史実の中の顯基
- 二 「あはれ罪なくして配所の月を見ばや」をめぐって
- 三 顯基説話の構成
- 四 「西行的」顯基
おわりに

はじめに

仏教説話集『撰集抄』は西行仮托の書である。古くは西行自著と信じられていたが、藤岡作太郎氏の「西行論」以来、西行自著でないことが明らかにされるや擬作として不当な評価を受けがちであった。そのため仮托性についても、第一次原形本から何らかの形で西行とかわりがあったものなのか否か、また広本、略本二系統

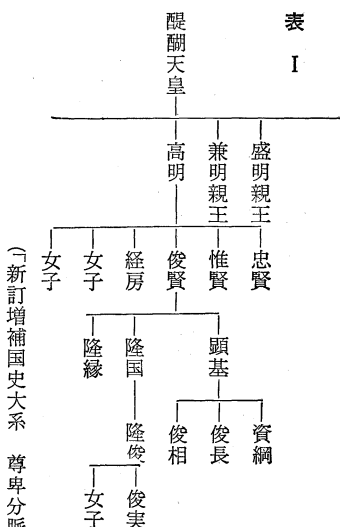
の諸本についてもそのいずれが古態を示すものなのか、いまだ定説を見ない。

が、いずれにせよ、仏教説話集においては「他人の批評や感想をそのままうけとめて」伝承者が「改めて自分のもののようにして伝承していく」という性格を有していたこと、また『撰集抄』が西行作として伝えられたことを考え合わせると、何次かの伝承者による自らを西行に仮托しての文学活動というものに注意を向ける必要があるのではないだろうか。西尾光一氏が述べておられるように³、「偽作としての抵抗を感じるよりも、西行自記をよそおうたその虚構のおもしろさをすなおにうけとめ」たいものだと思う。

ここでは『撰集抄』の説話の中から中納言顯基の説話をとりあげることにした。この説話は『撰集抄』以外にも『続本朝往生伝』『江談抄』『袋草子』『古事談』『発心集』等多くの書物に記されているものである。それらに

おける顯基との比較を試みつつ、西行仮托の書に描かれた顯基像を追求していくことにしたい。これにより『撰集抄』の性格の一端なりとも窺おうとするものである。

表 I



〔新訂増補国史大系 尊卑分脈〕

中納言顯基は 長保二年（一〇〇〇）権大納言源俊賢の子として生まれている。表Iの系図からもわかるように、醍醐天皇の皇子高明を祖とする醍醐源氏であり、弟には『今昔物語集』の作者と目される宇治大納言隆国がいる。

彼の祖父は、安和の変（九六九）に連座して太宰府に左遷された源高明である。死後も雷神となつて現われた

という道真の例をまつまでもなく、このような形で左遷の憂き目を見た一家の悲嘆ははかり知れないほど深い。高明の場合も例外ではなく、一家がばらばらに辺鄙な国に流され、あるものはゆくえ知れずになり、またあるものは出家を遂げるといった有様で「おもひしりたる人は、袖をぬらさじといふたぐひ」⁴ないほどであったという。世間からは失脚した者に対する冷たい目も注がれていたであろうから、このような状況を克服して一家の再興を果すのは並大抵のことではなかったはずである。が、高明の子孫はこれを成し遂げた。一旦没落した一家の復興には、まず顯基の父俊賢のなりふりかまわぬまでの活躍が大きな力となっていることを忘れてはなるまい。

政務に俊才を発揮し、斉信、公任、行成とともに「四納言」の一人に並び称せられるに到った俊賢は『大鏡』が伝えるように人の才能を見ぬく確かな洞察力⁵と、身にふりかかった苦境を脱し得るほどの「興言利口」の才。を身につけていたという。が、「流人」の息子である以上、彼の才を持ってもその地位を案々と手に入れたものとは到底考えられない。『小右記』には

近日上下云、斉信俊賢両・於左府宿所、毎日讒言尊卑、就中俊賢如狂、或云、俊賢如先主之時、可為顯

門臣之由、以書狀送女房許、謂本宮宣旨即經奏聞、天氣不快云々、毎聞如此事、若不尋常歟、貪欲謀略之聞共高之人也⁷

宰相云、民部卿一日參太相府、議定頭中將公成宰相事、其後太・府謁禪閣、被申云、公成可被兼、資平子孫事、此生此度許可申、又宰相兼中將、只九条殿一家事也。俊賢經房雖云源氏、皆是九条殿御女腹也。禪閣服膺者、密々頼任所談也。民部卿謀略尤高、左中將公成昇進替、以右中將顯基遷任、左少將隆國可任中將、顯基隆國戸部子也、抑源延光兼中將、非九条相府種胤如何、九条相府以前為宰相中將者數多、用謀略舌為規模何。

と記しているが、時には邪まといわれるような手段によつてでも彼は昇進を図つた。母が九条師輔の娘であることを足掛りに摂関家への接近を企てた俊賢はまず道隆に近づくのであるが、時勢の多り變わりを素早く察知するや道長方へと巧みな転身をやつてのけた。そしてその「御堂帷幄の側臣」⁹として活躍するまでになつたのである。道長と結びついた彼は、その子頼通とも直接交渉を持つたと言う。『古事談』は、俊賢が少年頼通に適切なアドバイスを与えて穢れに近づけなかつた¹⁰ことを伝えているが、このような摂関家との結びつきは顯基にもひ

きつがれ、後に彼が頼通の猶子となるに到る下地をも形成していたものと思われる。

だが、俊賢一家と摂関家をつなぐものはただ俊賢一人ではなかつた。もう一人忘れてはならないのが高松殿の上、明子である。

顯基の叔母、後賢の妹にあたる人物が高松殿の上、明子として道長の妻になつていたことが『大鏡』によつて知られる。¹¹ 明子は父高明が左遷されるに及んで、一旦はおじである十五の宮盛明親王にひきとられたが、盛明親王の死によつて、その後は東三条院詮子に養女として迎えられるところとなつた。そして詮子に「姫宮などのおはしませしごとくかぎりなく思ひかしづ」かれた彼女は、詮子が兄弟の中でも「とりわきてたてまつらせたまひて、いみじう思ひまうさせたまへりし」道長に娶せられたのである。「道長に政權を掌握せしめた功勞者」¹² 詮子の養女であり、同時に今を時めく道長の妻明子を妹に持つていたことは師輔の娘を母としていたこと以上に、俊賢の道長への接近を容易にしたと言えるかもしれない。

父俊賢の努力と叔母明子の存在があつたからこそ、顯基は高明の孫でありながら道長の息頼通の猶子として迎えられ、めざましい昇進を遂げることができた。参考ま

でに彼の榮達の様子を見てみることにしよう。

十二歳で従五位下に叙爵されて以来、侍従、右兵衛佐（十四歳）、左少将（十五歳）を経て十九歳で従四位下、二十四歳の時には藏人頭として後一条天皇に近侍し奉ることとなった。帝の寵を受けた彼は早くも三十歳の若さで参議として公卿の列に連なり、その後も順調に昇進を続け、周防守（三十一歳）を経て権中納言となったのは顯基三十六歳の時のことであつた。

このように朝臣としてめざましい榮達を遂げた顯基は、又一方では王朝人としての風雅の道にも優れた人物であつた。「自少年耽書好學」（『続本朝往生伝』）¹³と言われた彼は『後拾遺集』『新勅撰集』『続拾遺集』等の勅撰集にも四首入集しており、歌人としての活躍ぶりをうかがわせるが、また一方において『白氏文集』にも通じるなど漢詩文の方においても豊かな知識を有していたようである。そしてさらには石清水臨時の祭や道長室倫子の六十の賀の際の舞人をもつとめるなど、まさに「一流の風流才子」¹⁴としての面目を果している。こうした華やかな人生を送っていた人物の突然の遁世はいかにも世間の注目を集めずにはいかなかったことであらう。

二

顯基は後一条帝崩御を契機として遁世したが、彼の道心はその時突如として芽ばえたものではなかつたはずである。顯基は一体何故に遁世したのか。このことを考える上で大きな鍵となるのは「あわれ罪なくして配所の月を見ばや」という彼の口癖であらう。この言葉は彼が在俗の頃より世を通ることを望んでいたことを伝えている。では彼は何故に世を通れようとしていたのか。ここではこの言葉の意味するところから顯基が遁世に求めているものを探ってみることにする。

すでに戸谷三都江氏が指摘されている¹⁵ところではあるが、この言葉は諸書によつて

- (一) 無咎被流罪、配所ニテ月ヲ見バヤ
- (二) 罪なくして配所の月を見ばや

- (三) 配所にて月を見ばや

の三通りの表現をとっている。

(三)のようにごく短縮された場合はさておき、(一)と(二)では解釈に差がでてこよう。なぜなら「罪なくして、配所の月を見る」ことは通常現実にはあり得ないことではあるが、「配所」を一般的な流刑の地などと想定し、顯

基自身が流されるのではなく、他の誰かが以前配流になった場所であつた月を眺めるといふような場合を考えることも可能だと思われるからである。このようなことを考えあわせると (一)であれば

たとえ無実の罪をきせられてでも荒涼たる配所の月を眺めてみたい。

① 隠徳の聖達の始く「世モステ世ニモ捨テラレ」¹⁶ たい。

② 詩心をつのらせたい。

と解釈されるが、「無咎被流罪」ということを明確に示していない、(二)においては、(一)と同様の意のみならず、

無実の罪をきせられるのはたまらないが配所での月を眺めてみたい。

という様に解することもできるのであろう。『撰集抄』では(二)の形をとっている。顯基基の出自は前に述べたが、実際に左遷の憂き目を見た人物を祖父に持ち、又そのために苦勞を重ねてきた父の姿を目のあたりにしながら育った彼にとって、果して「無家の罪をもちとはいはれない」と言えるほど「流人」の苦しさは軽いものであり得たであらうか。安和の変は顯基の誕生からさかのぼることわずか三十三年、まだ一家の人々の脳裏に深い傷跡を残していたであらう頃のことであつたのだから。ここ

では「罪を蒙ることなく」という意であつたと解したい。

「風流才子」顯基を想うとき、「罪人にされるのはいやだが配所のような荒涼とした地で月を眺めてみたい」と解釈すると、多分に情趣的で遁世とは言ふものの仏道心などとはほとんどかわりなく風流のみを追求したもののように受けとられがちだが、決してそうではあるまい。これを証明するためには「元和十五年」に注目することが必要となる。

『撰集抄』ではいわゆる「説話評論」の部分において罪無して、配所の月を見はやと願給けん、けに／＼哀に侍り

に續けて

元和十五年の昔思出されて、心の中そゝろにすみても侍るかな。

と述べられている。この「元和十五年」と言うのは白居易左遷を指すものだと思われる。もちろん、白居易が左遷され「琵琶行」を作つたのは元和十年のことであり、十五年には罪を赦されて都に來っているのだから反論もあらうし、又一方では「失意の生活を経て都へもどつた時点での白居易の心境をふまえたものである」¹⁷という意見も出てこようが、それでは顯基自身が一旦罪をきせ

られ、後に赦されて都で「配所」を想いながら月を眺めるといふ非常に煩雑で不自然な手順を経なくてはならない。その上、この「元和十五年」というのは「龍門文庫本」では「元和十年」とされているし、¹⁸『延年舞曲歌謡』¹⁹の「尋潯陽江連事」では

是不寄思事仰候者哉 其唐大原白居易元和十五年秋、潯陽江頭シテ聞_レ彈_二琵琶_一為_二長句歌_一其名句ニテ候ゾヤ

と記して、「琵琶行」成立を「元和十五年」のことと述べているのであるから、『撰集抄』における「元和十五年」の記載もまた「元和十年」の誤りと見なすことができるのではないかと思われる。「十五年」という記載がどのような経緯でなされたものであるかということについては今はまだ明確な判断を下し得ないが、これが白居易左遷を指すものであることは間違いないまい。

顯基自身、『白氏文集』の詩を愛誦し、『撰集抄』の作者も又、「あはれ罪なくして、配所の月を見ばや」という彼の口癖から白居易を想起したとなれば、彼の「狂言綺語観」を思い起こさなくてはなるまい。

白居易は『白氏文集』の「香山寺白氏洛中集記」の中で

我有本願願以今生世俗文字之業狂言綺語之過。転

為_二将来世讀仏乘之因転法輪之縁_一也、十方三世諸仏心_レ知、

と述べて、文字の業「狂言綺語」を求道に通じるものとしてとらえる考え方を示した。「あはれ罪なくして……」という顯基の言葉から白居易を思い起こしたという以上、そこには「教寄即仏道」という考え方が存在していたのではないかと考えられる。

『法華経』「安樂行品」は

云何名菩薩摩訶薩親近処。菩薩摩訶薩。不親近。國王王子。大臣。官長。不親近諸外道。梵志。尼提子等。及造世俗文筆。讚詠外書。及路伽耶陀。逆路伽耶陀者。

と説いて「世俗文筆讚詠外書」を造る者には親しく近づくことすら禁じている。西行をして「遁世の身とならば、一すぢに仏道修行の外不可他事、教寄をたててここかしこにうそぶきありく条、にくき法師なり」と評した『井蛙抄』²¹の文覚の例を待つまでもなく、出家した以上仏道に専念すべきであるとする「出家者」観は厳然と存在していたはずである。が、また一方において、白居易の狂言綺語観もわが国に広く浸透し、ことに十世紀以後の勸学会においては詩人と僧侶との交歓も行われるほどであったと言う。これらを背景として

〈表 II〉

顯基説話構成要素一覽表

	① 俊賢の子	② 学問を好む	③ 出家を志す	④ 後一条天皇の寵臣	⑤ 出家	⑥ 燈明もともさないのを 歎く	⑦ 「配所の月」	⑧ 白居易の詩を愛誦	⑨ 上東門院と和歌の贈答	⑩ 子息俊実の将来を依頼	⑪ 病を得て念仏往生	⑫ 「忠臣二君に仕えず」	⑬ 室の遊女出家
左経記	(1016)				○								
日本紀略	1038				○								
後拾遺集	1036				○								
栄華物語	1087				○				○				
大鏡	1092	○			○				○				
扶桑略記	1093				○				○				
扶桑略記	1134	○			○								
続本朝往生伝	1094				○								
江談抄	1099	○	○	○	○	○		○	○		○		
今昔物語集	1103				○		○						
袋草子	1104				○								
今鏡	1112				○				○				
宝物集	1120				○								
古事談	1158		○	○	○			○	○				
発心集	1170				○								
平家物語	1174	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
閑居友	1180				○								○
撰集抄	1178				○								○
東関紀行	1212		○		○		○	○	○	○		○	
十訓抄	1215				○								
古今著聞集	1216				○								
百鍊抄	1219				○								
元亨釈書	1222	○	○		○						○		
徒然草	1322				○								
東斎随筆	1330				○								
大日本史	1331	○	○	○	○	○	○	○			○	○	
	1337				○								
	1481				○								
	1709	○	○	○	○	○	○	○			○	○	

我朝には神明和光為化度和歌をのぶ。これ則此国の陀羅尼なり。²²

などの如く「数寄」と「仏道」との一体観を述べたものも多く見られるのである。

むろんこのような「数寄即仏道」観は単に白居易の影響のみによるものとは言えないであろう。家永三郎氏が述べておられるように、四季おりおりの豊かな自然の変化の中に生活してきた私たち日本人は、遠く万葉人の昔から自然の「絶大な魅惑」のうちに「人生の痛苦を解消せしめる」力を見出してきた。²³「自然」が「心を澄ますもの」としてとらえられていたのである。だとすれば、この「自然」に対して自己の想いを述べる行為として「文字の業」もまた、「心を澄ますもの」、「仏道に通ずるもの」と考えられたのもあながち不自然なことではあるまい。日本人の置かれてきた精神的風土も無視することはできない。そしてこの環境的要因の上に 白居易の影響が加わって、数寄と仏道を一体とする考え方は流布していたのである。

めでたき往生人としてのみ描かれた往生伝での顯基ならばともかく、出家後も恩愛の情を断ちきれずにいる彼のことであるから、隠徳の僧達のように配所に流されることによって世間から「捨てられ」仏道に専念すること

を得んとする程には道心一筋で遁世したものとは思われないが、しかし出家後「目出行すまして、智行世に聞」えたという彼の姿は風流人としての面目を果しながらもなおかつ仏道と数寄とが一体化したところの意識を持って遁世とげたものであったと思わせるのである。

三

前章では「あはれ罪なくして、配所の月を見ばや」という言葉から顯基遁世の理由をつかむことができた。『撰集抄』での顯基像をよりくわしく知るために、ここで顯基説話の構成について調べてみることにしたい。

Ⅱの表は顯基説話を記載する書物についてこれを成立年代順に並べ、それぞれどんな要素の話から構成されているかについてまとめたものである。これによると『撰集抄』では、①②⑥⑨⑩の話についての記載がない。とりわけ⑥⑨は『撰集抄』と内容的にはほとんど同じような書物にはほぼ採られているにもかかわらず記されていないものである。『撰集抄』では顯基が仕えた「後一条天皇」を「後冷泉天皇」としているという誤りもあるが、それはさておき、前にあげたような違いは何故生じたものなのか考えてみることにしたい。

まず『撰集抄』のみでなく、他の説話においてもほとんど採られていない項目について見てみよう。

①②の出自、素質の項目については、同時代の説話集では『発心集』が①を記すばかりである。これはこの項目が「由緒正しきいきじみ往生人」を述べんとする往生伝においては必要とされても、単に願基の出家とその後の生き方を述べる説話においては特に必要とされなかったためであろう。『発心集』が願基の父を紹介しているのは次の説話に「俊賢」の名が見えることに関連があると思われる。彼らの親子関係が明らかにされることによって読者の関心は一層増大したことであろう。『発心集』の記述はこれを意図してなされたものであったと思われる。

又、⑫の病を得て念仏往生したという話も『続本朝往生伝』『大日本史』に伝えられるばかりであるが、これも同様に「往生人」としての事蹟をさほど重視しないために説話では語られていないのであろう。

では次に、他の説話には記されているのに『撰集抄』にだけ記されていない話について考えてみよう。

まず⑥は、新しい帝への奉仕にばかり気をとられて先帝には燈明も捧げる者がいないのを願基が嘆くという話で彼の出家の原因を物語るものであるが『撰集抄』には

記されていない。この話は「忠臣二君につかえず」という決意と相俟って忠義者の臣下としての一徹なまでの潔さを感じさせるものであるが、『撰集抄』ではこの言葉も最後の「説話評論」部分に既知の事柄として置かれておらず、讃嘆の響はあるが新たな感動はみられない。この二つを考えあわせると、他書における願基よりも『撰集抄』ではこの一徹さ、強さが失われてしまっているような感じさえうけるのである。

そのような意味では子息俊実（願基の子に俊実はいない。「俊相」の誤りであろう）²⁴を宇治の大殿頼通に托すという⑩の話も、これは『撰集抄』にも採られている話ではあるが同様に願基の弱さを伝えるものであると言えよう。仏道修行一筋に精進しなければならないはずの遁世者でありながら、彼はなお恩愛の情を捨てることができずにいる。「めでたく行ひすまして智行世に聞え」てはいても彼は仏道に専念することができずに苦悶していたのであろう。願基の迷いは深い。

しかしながら、彼はいかにも意志の弱い柔弱な人物というこのみを強調して描かれているわけでない。⑨の世を捨てて宿を出でにし身なれども、なほ恋しきは昔なりけり

の歌は出家の後もお昔の華やかな俗世の生活が捨てき

れずにいるという心情を述べたもので「忠臣二君に仕へず」と出家した者としてはふさわしくないようなめめしさを伝えるものであるが『撰集抄』においては記されていない。この歌は「あはれ罪なくして……」という在俗時の口癖とも思いあわせると単に風雅を愛するだけの「数寄」の遁世者として彼を仕立てるに充分のものであるのだから、ここでは彼がそのような人物としてのみ描かれているのではないことに注意すべきであろう。

では、「仏道者」としての顯基はどうなのか。これには⑩の遊女譚に注目する必要がある。この話は『閑居友』と『撰集抄』だけに見えるものであり、藤島秀隆氏のご指摘²⁵のように『閑居友』での記述を意識的に避けながら新たな内容を挿入しつつ書かれたものであると思われる。顯基の思われ人であった遊女が、彼に捨てられたことによって発心し、仏道に入ったというこの話は、とりもなおさず、罪業深い遊女を仏道に導くに到った顯基の道心の深さを述べるものである。確かに『撰集抄』巻五第一話には遊女の中にもかえって道心堅固に勤行につとめて往生をとげたものも少なくなかったことが述べられてもいる。浄土思想の強い時代であつてみれば、己れの罪が重いだけになおのこと、その罪の重さを悔い、魂の救済を希求せずにはいられなくなることもあつたであ

ろう。

我が身は罪業重くして、終には泥犁へ入りなんず、
入りぬべし²⁶……

とりわけ老年に及んで「俱尸羅の再誕 衣通姫の後目」²⁷と言われたほどの容色もおとろえれば

我等は何して老いぬらん、思へばいとこそあはれなれ、今は西方極楽の、弥陀の誓ひを念ずべし²⁸
と来世の幸せを願つて仏道に心を向けずにはいられなくなつたであらう。

しかしながら女であるということ、それだけですでに汝謂不久、得無上道、是事難信。所以者何。女身垢穢。非是法器。云何能得。無上菩提。佛道懸曠。逕無量劫。勤苦積行具修諸度。然後及成。又女人身。猶有五障。一者不得。作梵天王。二者帝釈。三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛者。云何女身。速得成佛²⁹

という成仏することの難しい存在なのである。ましてやれが身ばかりか「おほくの人をさへひき損」じ、魔界におとし入れる遊女の罪の深さはいかばかりであらうか。この罪深い遊女が顯基に捨てられたことによって発心入道し、「つゝに有意のごとく往生」するまでに到つたのである。遊女自身の道心のためたさは言うまでもないこ

とだが、そのきつかけを作った願基の力も見のがすことはできない。

此中納言もいみじき往生人にていまそかりけると、伝にのせて侍れば、さやうの事にてやいまそかりけん。つれもなき心のおもひ驚きて、世を秋風の吹きにけるにこそ……

「いみじき往生人」であつた願基だからこそ罪深い遊女をも仏道に導くことができたのだという願基の仏道心の強さに対する称讃がこの『撰集抄』にはこめられているのである。

四

平素より道心厚く、主君の死を契機に仏門に入り念仏往生を遂げた願基。彼の生き方はまことに「いみじき仏者」としての姿を示しているし、その内なる道心の自居易の詩をかりての表白というような行動は王朝人の優雅さをもかねそなえたものであり、まさに「当時の貴紳が翹望した理想の人物」³⁰と言えたであろうが、同時に『撰集抄』での願基は出家後も親子の恩愛の情に心動かされる人間的弱さをもさらけ出している。彼はひとえに念仏三昧にうちこむことができずにいる。大原を結縁に訪れ

た頼通に後世の話をしつつも、最後には息子の将来を托さずにはいられなかった。が、だからと言って、彼が仏者としていいかげんな生き方をしていたと言うのではない。

常日頃「世を通るゝ心」を持ちつつづけていただけに出家後は「目出行すまして、智行世に聞」えていたと記されている。また罪業深い遊女をも仏道に導く機縁を成したということをもとりあげている。

恩愛の道のあはれさに迷う人間的弱さと「いみじき往生人」としてのめでたさ、この二つの一見矛盾しているように思われる性格をあわせ持った願基の姿は、ただ『撰集抄』のあいまいさを示すものでしかないのであらうか。

ここで『撰集抄』の作者に仮托された西行を思い起こす必要がある。

西行についての考察はさまざまになされており、数寄の通世者と見る説³¹があれば、晩年これを超越するに到ったとする説³²もあり、また彼の多くの旅は勧進聖であつたゆえであるとする論³³もある。しかしながら彼は単なる勧進聖ではなかった。³⁴多くの勧進活動を行い、また二度も大峰入りの難行を成し遂げている。たとえ出家後も多くの歌を残し俗世への執着を断ちきることができな

かつたという非難があるにもせよ、先に述べたように数寄と仏道とを一体視する考え方が存在していたことは無視できないものであるし、また西行自身、和歌を仏道と相通するものにとらえていたと伝えられている。

西行上人常^ニ来^テ物語^ニ云^フ、我歌^ハ読事^ニ遙世^ノ常^ニ異也^{ナリ}、花郭公月雪都^テ万物^ノ與^ニ□^ニ向^テモ凡^ソ所有相皆是虚妄ナル事眼^ニサヒキリ耳^ニ満^リ、又読出所^ノ歌句ハ皆是真言非ヤ、花^ヲ読共ケニ花^ノ思事無^シ月詠スレ共実^ニ月共^ニ不存^ス、如是^ニ任^セ縁随^テ興^ニ読置所也^{ナリ}、紅虹タナ引ハ虚空イロトレルニ似タリ、白日嚇^ケ虚空明^ニ似タリ、然共虚空^ハ本明ナル物^ニ非^ズ、又イロトレル物ニモ非^ズ、我又此虚空如ナル心^ニ上^ニ於種々^ノ風情^ヲイロトルト雖更^ニ蹤跡無^シ、此歌即是如来^ノ真^ニ形体也^{ナリ}、去^テ一首詠出テハ一体^ノ尊像^ヲ造^ル思^フ成^ス、一句^ノ思ツ^テケテハ秘密ノ真言^ヲ唱^フ同^シ、我此歌^ニ依^テ法^ヲ得事有^シ、若爰^ニ不倒^ス妄^ニ人此詞学^ハ大^ニ可入邪路^ニ」³⁵

昔上人云。和歌は常に心すむ故に。悪念なくて後世を思ふも。其心をすゝむるなりといはれし。³⁶

そしてこの西行は

ねがはくば花の本にて春花なむそのきさらぎの望月の頃³⁷

と歌い、その願いの如く、二月十六日没した。彼の往生

のさまのみごときは仏者西行への讃辞を呼びおこし、その評価をより確実なものとして高めずにはいかなかったことであろう。だからこそ柳田国男氏によって紹介されているような多くの西行伝説は生み出されたとも言えよう。実際西行は多くの伝説を生み、人々に親しまれた歌人もあるまい。が、これはその往生の様子のためたさに加えて、彼がただ仰ぎ見るだけできないような悟りきった聖人ではなく、自己の苦悩をそのままに表出しつつ、自然に臨んで心を清まさんとした仏者であったことによると思われる。

西行仮托の書である『撰集抄』をその仮托性をふまえながら読むにあたっては、史実における西行そのものよりも、むしろ「西行」なる人物がいかに人々の心にとらえられていたかが問題となろう。『撰集抄』の原形なるものは西行とは何らかかわりのないところから出発したものであったかもしれないが、何次かの『撰集抄』作者達が彼らの心に浸透していた「西行像」を通して、西行ならばこんな時どのように述べたか、それを推察しながら説話集を編纂していったものに違いないのだから。

このようにして見てくると、仏者としての道心のためたさと、俗縁を脱却し得ない人間的弱さを同時に兼ね備えた『撰集抄』の顯基はまさに「西行的人間」であった

と言えるだろうし、又多くの説話集等に採られた顕基などの顕基とも異なる『撰集抄』の顕基としてかく位置づけた『撰集抄』の仮托性にも注目しなくてはならないと思うのである。

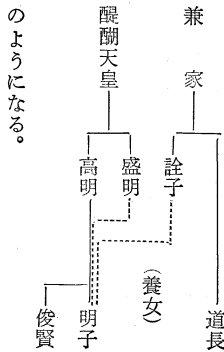
おわりに

顕基に関する説話は『撰集抄』に二話記載されているが、略本には見えなかったり、『閑居友』からの採録と考えられたりでいずれも西行自著とは考えられないものである。この二話によって『撰集抄』に登場した顕基がその思想、行動において西行に酷似していたというのは注意すべきことであろう。この二話は西行仮托と明確に性格づけられるものではないが、西行に仮托された説話集の中で「西行的人間」を生み出した例として興味深いものだと思うのである。

〈注〉

- 1 『異本山家集』（本郷書院 明治39年10月）
- 2 西尾光一氏『撰集抄』における説話評論（山梨大学学芸部研究報告第16号 昭和41年2月）
- 3 注2に同じ
- 4 『蜻蛉日記』安和二年六月の条（『日本古典文学大系』）

- 5 『大鏡』伊尹伝（『日本古典文学大系』）
 - 6 『大鏡』師輔伝
 - 7 『小右記』寛弘8年7月26日の条（『史料大成』）
 - 8 『小右記』万寿 年3月15日の条
 - 9 長野常一氏「宇治大納言をめぐる」（『日本文学研究資料叢書 今昔物語集』所収）
 - 10 『古事談』第2臣節（『国史大系』）
 - 11 『大鏡』道長上
- これによって系図を示すと



- のようになる。
- 日本古典文学全集『大鏡』付録人物一覧による。
- 『群書類従』
- 注9に同じ
- 『顕基の説話と『徒然草』(白)』（『学苑』昭和48年11月）
- 『沙石集』（『日本古典文学大系』）
- 沼波政保氏「配所の月」私見——『撰集抄』巻四第五話を中心に——（『同朋学園佛教文化研究所紀要』創刊号 昭和54年3月）
- 注17付記による
- 高野辰之氏『日本歌謡集成』巻五近古篇（春秋社 昭和3年11月）
- 岩波文庫

- 21 『井蛙抄』第六(『統群書類従』)
- 22 『沙石集』(『日本古典文学大系』)
- 23 『日本思想史に於ける宗教的自然觀の展開』(齊藤書店
昭和22年12月)
- 24 これについては、戸谷三都江氏「顯基の説話と『徒然
草』(四)」「学苑」昭和49年2月に詳しい。
- 25 『閑居友』下巻部にあらわれた民俗性(『説話物語論集』
創刊号 昭和47年12月)
- 26 『梁塵秘抄』(『日本古典文学大系』)
- 27 『遊女記』(『新校群書類従』)
- 28 注26に同じ
- 29 『法華經』提婆達多品
- 30 注9に同じ
- 31 川田順氏『西行』(創元社 昭和14年11月)
- 32 目崎徳衛氏『西行の思想史的研究』(吉川弘文館 昭和
53年12月)
- 33 五来重『高野聖』(角川新書 昭和40年5月)
- 34 石田吉貞氏『西行学の西行喪失——勸進聖説・歌道脱却
説批判——』(『文学』 昭和56年8月)
- 35 『柁尾明恵上人伝』(高山寺資料叢書『明恵上人資料第一』
昭和46年3月)
- 36 『西公談抄』(『群書類従』)
- 37 『続古今和歌集』1535(『国歌大観』)